



診療放射線科
小林 実央

世界中で様々な出来事があった「平成」の時代も残すところ約半年となりました。医学、医療分野においても飛躍的な進歩がメディアにも取り上げられており、病気は予防や早期発見、早期治療が最も重要とされています。今回は身近な胃の病気の早期発見に繋がる検査についてお話しさせていただきます。

まずは、胃がんになりやすい人の特徴です。①多量の塩分②多量の飲酒③喫煙④ヘリコバクターピロリ菌に感染といったリスク要因を持つ方です。日本では胃がんの罹患率が高く、年間13万人が胃がんと診断されています。40代から増加し50～60歳で多く、男性の発症は女性の2倍です。胃の粘膜内の細胞が何らかの刺激や原因でがん細胞となることで、胃がんが発生します。胃への刺激を減らすこと、例えば塩分の高い食品の取りすぎに注意することや野菜や果物が不足しないように配慮をすることで、胃がんのリスクを減らすことができます。

ヘリコバクターピロリ菌とは、胃に取り付いて炎症を起こす細菌のことです。50歳以上の方は約70%以上の方がピロリ菌に感染しているとされています。感染した全ての方が胃がんになるわけではありませんが、放置しておくとも慢性胃炎、胃・十二指腸潰瘍、胃がんなどが引き起こされることがあります。ピロリ菌の感染と胃がん発症の因果関係が報告されており、胃がんを予防するという意味でもピロリ菌除菌の有用性が示されています。

バリウムを経口摂取するため敬遠されがちな胃のレントゲン検査ですが、胃がんの早期発見と同時にピロリ菌感染の有無を調べる目的で行っている検査です。更に、胃炎やポリープ、胃潰瘍の発見に対しても有用性があります。

バリウムは造影剤の一種です。通常では見えない胃の壁やひだ、形を見るために飲んでいただきます。バリウムがドロドロと粘性を持っている理由は、バリウムを胃の粘膜に留めておきやすく、すぐ洗い流されないようにするためです。美味しい味のものだと胃酸の分泌が活発になってしまい、せっかく飲んだバリウムが胃粘膜から洗い流されてしまいます。これは、美味しそうなものを目の前にするとよだれが出る、レモンや梅干を見ると唾液が出るといった現象と同じことです。

バリウムの飲み方のコツは、口に含んでいる時間を極力短くし一気に飲み込みます。口の中に貯めてしまったり、飲み込むのをためらっていると苦しくなってきます。一口を多めにしてしまうと飲み込むのが大変になりますので、一口で飲み込める量を口に含み、飲み込んでください。

最近では、検査に必要なバリウムの量が少なくなり、味がついているものを使用しているため、検診者の方への負担が少なくなっています。少しでも興味を持っていただき、胃の病気の早期発見に努めていきましょう。

